

## 複数言語環境で育つ高校生が自己効力感を高めキャリア選択へと向かうプロセス —「書く」ことの実践を通して—

小林美希 (早稲田大学大学院 招聘研究員)

### 1. はじめに—フィールドの背景と特徴—

本発表では、複数言語環境で育つ高校生が、多様な言語資源を駆使しながら「書く」ことを通じて自己と向き合い、キャリア選択へと向かうプロセスを実践から明らかにする。本実践のフィールドは国内私立高校（以下、当該校）である。当該校は、特別枠の入試制度を設置し、複数言語環境で育つ生徒を積極的に受け入れており、中国語、英語、タガログ語、韓国語、ベトナム語等を母語とする生徒が数多く学んでいる。生徒の多くは親の都合によって来日し、さまざまな困難を抱えながらもキャリア形成を望み、日本の大学への進学を目指し、日本語学習に取り組んでいる。当該校には、母語による「書く」力を十分身に付けているものの、来日したばかりで日本語の文字を書き出す段階の日本語の発達段階にある生徒もいれば、来日後、数年が経過し、大学受験に向けた小論文の課題に対し、多様な角度から自身の主張を日本語で展開していける生徒もいる。このように、当該校には、さまざまな日本語の発達段階にある生徒が在籍している。

### 2. 実践の概要

#### 2.1. 本実践について—小論文コンテストへの応募—

当該校では、学年別に週に6時間、取り出し授業の形で日本語授業が進められている。本発表では、2021年6月から2021年9月にかけて、日本の大学への進学を希望する高校3年生3名を対象に行われた「アカデミック・ライティング」の授業を実践事例として取り上げる。3名ともに小論文審査がある総合型選抜入試を予定していた。この期間は、外部の教育機関が高校生を対象に主催している小論文コンテスト応募（テーマ：「志—新型コロナショックを超えてどう生きるのか、それを支える志とはどのようなものか」）に向けた授業を行った。

#### 2.2. 対象生徒について

本発表では、小学6年生の時に来日した中国語を母語とする高校3年生Aに注目する。教師間で共有されているAの日本語能力の特徴として、以下の点が挙げられている。学校の生活場面のほとんどで教師の指示が理解できる一方、語彙や表現の使用範囲は限られており、複雑な展開で抽象的な語彙を含む読み物などを独力で理解することは困難である。本発表で焦点を当てている「書く」ことに関しては、自己紹介文・自己PR文等、個人的な内容でも、助詞、接続表現、句読点等、基本的な日本語のミスが見られる。自身が考えている内容を表現することを途中で諦め、記述内容も漠然とした内容で深みがない印象を与えることがある。

#### 2.3. 本実践の目標

本実践は、大学受験を控えた生徒たちが自身の考えや主張を他者に読んでもらう機会を得ることで、より実践的かつ戦略的に「書く」ことを学ぶ機会になると考え、当該年度に初めて実施したものである。大学受験を数か月後に控えた段階で実施した本実践を通して、生徒たちが多様な自己の側面を認識し、自らの生と向き合う機会を得、キャリア選択へと向かっていくこと、そして、多様な言語資源を駆使しながら、思考を言語化していくことを目指した。

### 3. 実践の内容

2.3 で挙げた目標を達成するために、個別指導の時間を多く設定し、以下のように実施した。

表 1 実践の流れ (対：対面、W：Web 会議システム (ZOOM)、全：全体授業、個：個別指導)

時数	形態	内容
1-2	対・全	過去の受賞作品の読解・小論文の構成
3-10	対・個	ブレイン・ストーミング、テーマ決め、構成メモ作成、下書き提出
	メール	下書き提出、教師フィードバック
11-12	対・個	夏休み中に提出した原稿の内容について確認・提出予定原稿の確認
13-16	W・個	原稿用紙に清書原稿を完成させる・メール提出

### 4. 結果と考察

「書く」ことを通して自己効力感を高めキャリア選択へと向かうプロセスとして、以下の段階が見えてきた。まず、抽象度の高い言葉を、実践者とのやりとりを通して理解していく中で、思考が整理されるという点である。A は、大学卒業後、化粧品会社に就職し、日本の技術力を取り入れた製品を母国である中国で発売できるような道筋を作りたいという内容を、テーマ決めの段階から述べていた。その際、「多言語主義」という語句を使いながら、その夢を抱くようになった経緯を説明していた。当初 A は、「多言語主義」という語句の意味を、国や社会に結び付けて考えているのではなく、A 個人の能力 (複言語性があること) として捉えていたのである。そこで、発表者と A は、A が認識している「〇〇主義」といった語句の意味を紐解き、新たに考えを形づくりながら「書く」活動を進めていった。A は新たに語句の概念を獲得する過程の中で小論文の内容をより深く考えるようになり、論点も明確になっていった。

次に、「書く」活動を通して思考を言語化していく中で自己と向き合う経験が、自身の複言語性をより深く認識する契機となり、新たなキャリア選択へと向かうという点である。「多言語主義」という語句の概念を教師とのやりとりを通して理解していく中で A は、これまでの経験を書き出し、自身の複言語性について認識を深めるようになるとともに、漠然と語っていた将来の夢や夢を叶えるための学部選択についても、より深く考えるようになっていった。具体的には、自身の複言語性を活かした上で何を目指すかという点を考えるようになり、新たに社会科学系の学部に興味を示し、受験に向けた準備を進めるようになっていった。

キャリア選択の行動が具現化されるためには、ある程度の自己効力が必要である一方、「自己効力の認知は単に高ければそれでよいものではない」(安達 2020 : 51) という。本実践では、高校 3 年生 3 名が対象であったため、個別指導を中心とした活動を行い、今後の目標や将来の夢をもとに、生徒一人ひとりが過去の経験を振り返り、思考を言語化しながら自己効力と関連付けることができた。今後は、より多くの生徒が履修するクラス運営を行う中で、どのように授業を進めていくべきか、具体的な内容と方法を考えていきたい。

付記

本発表は、科研費 JSPS 22K20225、24K16112 の助成を受けたものです。

#### 【引用文献】

安達智子 (2020) 「社会的認知理論」日本キャリア教育学会編『キャリア教育概説』東洋館出版社 pp. 48-51